

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03202

研究課題名(和文) 文学理論の生態学的転回にむけた学際的共同研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Collaborative Research Project Towards the Ecosophical Turn in Literary Theory

研究代表者

三原 芳秋 (Mihara, Yoshiaki)

一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授

研究者番号：10323560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：「(人間)主体」の諸機能＝学科を軸に制度化されてきた人文学を「生きている存在」一般の学として再編成する(＝「生態学的転回」)ために、多様な専門の若手研究者が集い、「共同フィールドワーク」や芸術制作・コミュニティ運動の現場とのダイアロジカルな共同作業を通して従来型ではない「共同研究」のかたちを案出することが実践的に試みられ、そのプロセスは確固たる端緒を開くに至った。また、環境・社会・精神のエコロジーを美的に統合する「エコゾフィー」的思考を共有する基盤となるべき「新たな一般教養」構築を文学理論の「生態学的転回」を軸に試みる企図も、国際的・学際的に一定の承認を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：Humanities has been institutionalized in accordance with the "faculties" of human subjects, but it is now of great urgency that it be reformulated as <scientia> of "living beings" in general. Young scholars in various fields, who shared this sense of urgency, formed the "Ecosophy Collective" so as to search for a possible invention of certain unconventional and innovative forms of "interdisciplinary collaborative research" by virtue of the collective fieldworks and dialogical collaborations with non-academic practitioners such as artists and community workers. Apart from those "practical" achievements, we have also been engaged in a "theoretical" project whose objective is to bring the "ecological turn" in literary theory into that of the humanities in general. Those practical as well as theoretical pursuits have successfully found their solid points of departure during the designated research period and enjoyed certain recognition both interdisciplinarily and internationally.

研究分野：英語圏文学・文学理論

キーワード：生態学的転回 共同フィールドワーク 共同執筆 現場との接続 未来語りのダイアローグ

## 1. 研究開始当初の背景

「生態学的アプローチ」（ギブソン）によって人文的知を包括的に見直そうという機運が益々高まるなかで、各自の専門における従来の枠組に限界を感じていた40代前後のメンバーが出会い、問題意識の共通性および領域横断的探究の必要性に気づくことにより京都で結成された「エコゾフィー研究会」が、本共同研究の〈はじめり〉である。われわれの課題は、まさに、「自然環境に留まらない環境〔環世界〕」（Morton 2007）理解であり、そこにおける「主体」概念の拡散と、その拡散の底に見えてくる「生命論（存在論）」的実在への接近にあった。そのような思考を貫徹することは、人文学（＝「人間の学」）が制度化されるなかで乖離してしまった人文的知の諸領域を、「生きている存在」（Ingold 2011）一般の学として再編成することにつながる。それは必然的に、人文学的知一般の〈転回〉——生物学（ユクスキュル）・心理学（ギブソン）・人類学（ペイトソン）・哲学（ベルクソン／メルロ＝ポンティ～ドゥルーズ／ガタリ）・言語学（バンヴェニスト）などの先達に導かれながらの〈転回〉——を引き受けなければならないことを意味する。そのためには、広く学際的な共同研究が必要不可欠であるのみならず、学問世界の〈外部〉におけるさまざまな実践者たちとも接続しながら「共同研究」のあり方そのものを問いなおすような新たな「研究」の〈かたち〉が要請されることは必定であった。

「人間（精神）」と「自然環境」の二分法を転倒するだけの通俗「エコロジー」的思考に陥ることなく、環境・社会・精神のエコロジーを美的に統合する「エコゾフィー」（ガタリ 2008）的思考を共有するための基盤となるべき「新たな〈一般教養〉」構築の方途を脱領域的に探究するなかで、乗り越えられるべき「言語中心主義」と密接にかかわってきた文学理論は（逆説的にも）今こそ本質的な役割を担うことになるのではないか、という仮定が生まれることとなった。すなわち、もっとも困難に思える「文学理論の〈生態学的転回〉」を強力に遂行することが、ひいては、目下急務の「人文学（一般）の〈生態学的転回〉」を前進させる起爆剤となるであろうと考えられたのである。

## 2. 研究の目的

若手研究者の私的集まりであった「エコゾフィー研究会」が、科学研究費の補助を受ける共同研究へと脱皮する際に抱いた目的を、大きく2点に絞って要約すると、

- (1) 上記のような〈生態学的転回〉を軸にした新たな一般教養構築のための基礎理論を国際的評価に耐えうるものへと練磨するとともに、

- (2) その理論を実践に移すモデルケースとして共同フィールドワークを実施し、理論・実践の両面で新機軸を打ち出していく、ということになる。

## 3. 研究の方法

上記の目的を達成するための具体的な方法は、(1) メンバーによる研究発表を通じた情報・問題意識の共有、(2) 各専門分野の有識者を招いての共同討議、(3) 学問世界の〈外部〉で活躍するさまざまな実践者との交流・共同作業、(4) 共同フィールドワーク、(5) 国際的ネットワークの構築などがあり、これらを同時並行で進めつつ有機的に統合することが目指された。

## 4. 研究成果

目に見える「結果」よりも「プロセス」が孕む潜勢力をつねに重視している本共同研究であれば、その「成果」を箇条書きにすることはむずかしいが、あえて以下の5点に絞って要約を試みる。（それぞれの具体的な内容については、各年度の報告書を参照。）

### (1) 「共同研究」の生態学的転回

異分野の研究者たちが「共同研究」を行う際に理論や言説の〈横断性〉に仮託するのではなく、ある具体的な現象や現場に〈共に身をおく〉ことによって開かれる新たな次元を模索するという意味で「共同研究」の〈かたち〉自体を「生態学的」に転回することを目指し、北海道浦河町「浦河べつるの家」、鹿児島・奄美群島、広島・呉といった現場における「共同フィールドワーク」を敢行した。

### (2) 「共同執筆」の試み

成果の「発信」そのものに「生態学的」なプロセスを要請する本共同研究は、フィンランド発祥の新たな対話型プラン決定の方法論である「未来語りのダイアログ」（アーンキル&セイクラ）の形式を借り、京都ー広島と時間的・空間的移動も交えながら、従来型の「単著論文の寄せ集め」ではない「（芸術作品の）共同制作」に比すべき「共同執筆」の可能性を模索したが、そのプロセスにおいて「発信」の形式・媒体・目的等をめぐる考え方における深刻な齟齬が浮き彫りとなり、最終的には共同での「成果発表」を（現時点では）断念するに至った。しかしながら、この真剣な討論を通じて「共同研究」の意義・本質を再認識することとなり、それが(3)(4)のような成果につながったことは疑いえない。

なお、全体での「共同執筆」には挫折したが、家族療法の専門家である花田と文化人類学が専門の中谷とが互いの知見を持ち寄ることで書かれた実験的な論文(論文①)のような成果が生まれ、今後も同様の試みを多く行っていきながらゆるやかな全体性を保ち続けていくつもりである。

(3) 各自の学術的「発信」

メンバー各自が専門分野の枠組からいったん離れ「共同研究」を実施し、そこからふたたび自分の学術的専門領域に戻って「発信」するという点で、実に多くの成果を残すことができた。ここにそれらをすべて記すことはかなわれないが、一例を挙げると、三原がソウル大学に招聘された際に「文学理論の生態学的転回とは何か?」という提題のもと韓国の若手研究者たちと闊達な議論を行った(学会発表①)結果、本共同研究の志向・成果が国際的・学際的にとおおいに通用するものであることが確認された。

(4) 各自の社会的「発信」

本共同研究のそもそもの傾向として、学問の世界からはみ出し「社会」に入りこんでいく運動が見られるが、それは、各自がそれぞれの生活空間において〈現場〉とのダイアロジカルな共同作業を継続的に行うというかたちで現在も進行中の「研究成果」である。それらの多くは各自の学術的知見を〈現場〉に開いていくというものであるが(松嶋・比嘉・太田・鶴戸)、少々毛色の違うものとして、赤嶺が編集人となって「観客による観客のための雑誌」を標榜する『地下室』が発刊されることとなったのも、広い意味で本共同研究の「生態学的」な波及効果と言えるだろう。

(5) 国内外ネットワークの構築

メンバー各自がそれぞれに持つネットワークを有機的に結合するために、京都での研究会にゲストを招いての集中討議やメンバーによる有識者の訪問を積極的に行った。また、われわれのネットワーク構築は学問の世界に留まるものではなく、芸術制作やコミュニティ運動の「実践」の〈現場〉との接続においても多くの成果を挙げた。

[参照文献]

Morton, Timothy. *Ecology without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2007.  
Ingold, Tim. *Being alive: Essays on movement, knowledge and description*. Routledge, 2011.  
ガタリ, フェリクス(杉村昌昭訳)『三つのエコロジー』平凡社ライブラリー、2008。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計48件)

- ① 花田里欧子 & 中谷和人、偶然と例外の心理臨床—些細ではない些細なことのために—、東京女子大学心理臨床センター紀要、査読無、8、2018、61-67頁。
- ② Takada, Akira、The Kyoto School of Ecological Anthropology: A Source of African Area Studies at Kyoto University、Takada, A. (Ed.), *Special Issue: Reconstructing the paradigm of African Area Studies in a globalizing world. African Study Monographs*、54、査読有、2018、41-55頁。
- ③ 鶴戸聡、「引揚げ文学」の問いを開く、立命館言語文化研究、査読無、29(3)、2018、109-115頁。
- ④ 三原芳秋、The Invention of "Japanese" Literature in Colonial Korea, or How Shame-less Literary Engagement Could be under Colonial Condition、文艺理论研究(華東師範大学)、査読有、39(3)、2017、108-129頁。
- ⑤ 松嶋健、喚起する言葉—人類学的記述をめぐって、臨床精神病理、査読無、38(1)、2017、83-90頁。
- ⑥ 吉川正人、木本幸憲、岡本雅史、佐治伸郎、理論研究再考—理論・モデルは社会言語科学にどう貢献するか?—、社会言語科学、査読無、19(2)、2017、87-92頁。
- ⑦ 太田貴大、怪異・妖怪伝承データベースに基づく伝承呼称数と島嶼環境特徴との関係性:奄美群島と長崎離島を対象として、第20回日本環境共生学会学術大会発表論文集、査読無、2017、117-122頁。
- ⑧ 高梨克也、多職種チームにおける協働のための工夫と困難—日本科学未来館展示制作チームのフィールド調査から、質的心理学フォーラム、査読有、9、2017、45-53頁。
- ⑨ 三原芳秋、“Immature poets imitate; mature poets steal” — テクストの／における〈海賊行為〉にかんする予備的考察、稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築』思文閣出版(図書所収論文)、査読有、2017、620-680頁。
- ⑩ 三原芳秋、生命在焉 — 駒込武著『世界史のなかの台湾植民地支配』を文弱の徒が読んでみる、ならば —、クアドランテ[四分儀] — 地域・文化・位置のための総合雑誌、査読有、19、2017、69-76頁。
- ⑪ 比嘉理麻、食べられるブタ、嫌われるブタ、愛でられるブタ—沖縄のブタ食文化から考える、赤江雄一(編)『食べる—生命の教養学12』慶應義塾大学出版会(図書掲載論文)、査読無、2017。

- ⑫ 高梨克也、インタラクション分析に基づく科学コミュニケーションのリ・デザイン、村田和代(編)『市民参加の話し合いを考える』ひつじ書房(図書掲載論文)、査読無、2017、51-73頁。
- ⑬ 岡本雅史、コミュニケーションの「場」を多層化することーメタ・コミュニケーション概念の認知語用論的再検討ー、社会言語科学、査読有、19(1)、2016、38-53頁。
- ⑭ 花田里欧子、Gregory Batesonによる生の基準としてのメタ・コミュニケーションとその系譜ー1946年3月第1回メイシー会議から1987年『天使のおそれ』までー、社会言語科学、査読有、19(1)、2016、54-69頁。
- ⑮ Senzaki, S., Masuda, T., Takada, A., and Okada, H., The Communication of Culturally Dominant Modes of Attention from Parents to Children: A Comparison of Canadian and Japanese Parent-Child Conversations during a Joint Scene Description Task, PLoS ONE、査読有、11(1)、2016。
- ⑯ Udo, Satoshi, Présence maghrébine au Japon: Contextes historiques de traduction et d'interprétation, Expressions maghrébines、査読有、15(1)、2016、187-197頁。
- ⑰ 鶴戸聡、小さな文学にとって〈世界文学〉は必要か?、文学、査読無、17(5)、2016、149-167頁。
- ⑱ 松嶋健、異なるものへの開かれ: イタリアにおける人類学と精神医学の目に見えぬ協働、こころと文化、査読無、15(1)、2016、95-97頁。
- ⑲ Takada, Akira、Employing ecological knowledge during foraging activity: Perception of the landform among the G!ui and G!ana, Takada, A. (Ed.), *African Study Monographs, Supplementary Issue*、査読有、52、2016、147-170頁。
- ⑳ 花田里欧子、「現代青年と「居場所」ー家族心理学と家族療法の視点からー、東京女子大学心理臨床センター紀要、査読有、6、2016、47-53頁。
- ㉑ 中谷和人、物語る私のドローイングーある心身障害者にみる、『線』が切り開く生の新たな可能性について、文化人類学、査読有、81(3)、2016、431-449頁。
- ㉒ 太田貴大、高田雅之、生物多様性オフセットの対象としての社会的ネットワーク、環境アセスメント学会2015年度大会要旨集、査読無、2016、150-155頁。
- ㉓ Takagi, G., Wakashima, K., Sato, K., Ikuta, M., Hanada, R., & Smock, S. J., The Development of Solution Building Inventory Japanese version: Validation of the SBI-J 3, *Culture and Brain*、査読有、5(1)、2015、19-25頁。
- ㉔ 高梨克也、懸念を表明する: 多職種ミーティングにおける野生の協同問題解決のための相互行為手続、認知科学、査読有、22(1)、2015、84-96頁。
- ㉕ De Antoni, Andrea, Demoni e esorcismi nell'Asia Orientale, *Proceedings of the X Corso sul Ministero Dell'Esorcismo e la Preghiera di Liberazione*、査読無、2015。
- ㉖ 川上夏林、有意味と無意味の狭間でー〈痛み〉を生きる身体ー、IMAJU(関西障害者定期刊行物協会)、査読無 62、2015、39-44頁。

[学会発表](計90件)

- ① 三原芳秋、文学理論の生態学的転回とは何か?、ソウル大学比較文学研究室コロキウム(招待講演)(国際学会)、2017。
- ② 三原芳秋、「国民文学」再考ー「文学理論」の普遍性をめぐってー、ソウル大学人文科学研究院コロキウム(招待講演)(国際学会)、2017。
- ③ Takada, A., Participation in rhythm: !Xun socialization through singing and dancing activities, *Seminaire special du CLLE-LTC*(招待講演)(国際学会)、2017。
- ④ Takada, A., The cultural and ecological foundations of ethnicity among the !Xun of North-central Namibia, the seminar of Comprendre les relations Afrique-Asie: espace transversal de recherches et d'enseignement (CRAA-ETRE)(招待講演)(国際学会)、2017。
- ⑤ 高田明、言語人類学, エスノメソドロジー, 会話分析ーコミュニケーションの民族誌から相互行為の人類学へー, 第90回日本社会学会大会、2017。
- ⑥ 岡本雅史、テキストの対話変換実験に基づくナラティブの共話可能性の検討、第20回日本語用論学会年次大会ワークショップ、2017。
- ⑦ Ota, Takahiro, Assessing dependence of folk culture on local ecosystem: an islands case in Japan, *Ecosystem Services Partnership*(国際学会)、2017。
- ⑧ 高梨克也、環境の中での他者の身体動作に現れた志向の観察者にとっての利用可能性、2017年第1回からだ発達研究会(招待講演)、2017。
- ⑨ 中川奈津子、琉球八重山語白保方言の概観、白保講座(招待講演)、2017。
- ⑩ 三原芳秋、The Invention of "Japanese" Literature in Colonial Korea, or how shame-less literary engagement could be under colonial conditions、華東師範大学・思勉人文講座 338(招待講演)(国際学会)、2017。
- ⑪ 花田里欧子、入野俊夫、古山宣洋、井上雅史、& 中島隆太郎、臨床心理面接コーパスと感情推移観測システム(EMO system)を用いた傾聴学習支援、HCS、2017。

- ⑫ Takada, A., The cultural and ecological foundations of ethnicity among the !Xun of Northcentral Namibia, *Comprendre les relations Afrique-Asie: espace transversal de recherches et d'enseignement* (招待講演) (国際学会)、2017。
- ⑬ 三原芳秋, Re-inventing Edward Said's Humanism in East Asia, 仁荷大学国際シンポジウム「Humanism and Humanistic Education」(招待講演) (国際学会)、2016。
- ⑭ 松嶋健, Ecology of voices: How people deal with auditory hallucinations in Japan and Italy, East Asian Anthropological Association 2016 Meeting (国際学会)、2016。
- ⑮ 松嶋健, 社会を Manicomio から解放する—イタリアにおけるある協働の歴史、日本精神医学史学会第20回大会(招待講演)、2016。
- ⑯ 岡本雅史, 課題達成対話の基盤化を実現する言語・非言語情報の多重指向性、第19回日本語用論学会年次大会、2016。
- ⑰ 岡本雅史, グランド・セオリーなきコミュニケーション研究を補完するものは何か?、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS&VNV)合同研究会、2016。
- ⑱ Ota, Takahiro, Masayuki Takada, Social network generated through wetland management activities: block modelling and reduced graphs to reveal general patterns, 2016 Asian Ecosystems Services Partnership Conference (国際学会)、2016。
- ⑲ 鶴戸聡, 小文学礼賛、あるいはなぜ外国小説を読むのかについての新たな問い、第24回全伯日本語・日本文学・日本文化学会/第11回ブラジル日本研究国際学会(XXIV ENPULLCJ/XI CIEJB) (招待講演) (国際学会)、2016。
- ⑳ 比嘉理麻, ブタへの嫌悪と好意に揺れる沖縄—産業化に伴う悪臭言説の登場と在来種復興運動、琉球沖縄学会(招待講演) (国際学会)、2016。
- ㉑ 高梨克也, 会話とその認知的・社会的環境、電子情報通信学会思考と言語研究会(招待講演)、2016。
- ㉒ 松嶋健, イタリアにおける〈地域〉の思想—精神病院の廃絶と地域精神保健の展開、広島大学・大連外国語大学学術交流会(国際学会)、2016。
- ㉓ 岡本雅史, 聞き手行動が孕む二重の他者指向性—漫才のツッコミは何を行っているのか、ラウンドテーブル『<聞く・聴く・訊く>こと—聞き手行動の再考—』(招待講演)、2016。
- ㉔ De Antoni, A., The Devil's Psychiatrist: Affective Correspondences in the Discernment of Mental Illness and Demonic Possession in Contemporary Italy, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Conference (国際学会)、2016。
- ㉕ 松嶋健, 「人間する」ことを学ぶ—イタリアの地域精神保健が問うもの、日本ダイケア学会 第20回年次大会(招待講演)、2015。
- ㉖ 松嶋健, 天命反転地域—地域を耕す、希望を耕す、日本精神障害者リハビリテーション学会 第23回大会(招待講演)、2015。
- ㉗ 松嶋健, 地域を耕す—精神障害と精神医療をめぐるイタリア的アプローチ、UTCP2015 キックオフシンポジウム(招待講演)、2015。
- ㉘ Takada, A., Action anticipation in singing and dancing activities among toddlers of the !Xun of north-central Namibia, Loch Lomond Symposium on Action Anticipation (招待講演) (国際学会)、2015。
- ㉙ Takada, A., Unfolding cultural meanings: Wayfinding practices among the G'ui/G'wana of the Central Kalahari, the Satterthwaite Colloquium on African Ritual and Religion (招待講演) (国際学会)、2015。
- ㉚ 花田里欧子, 学校・家族システムにおけるヒューマン・サービスの適正化—子どものより良い成長のために—、日本家族心理学会 第32回大会、2015。
- ㉛ 岡本雅史, ファシリテーションにおける響鳴—個人内の理解から集団内の共有化へ—、社会言語科学会 第36回研究大会、2015。
- ㉜ Ota, Takahiro, Takada, M., Differences and similarities in social network structure between government-made local groups and a spontaneously-organized ones: suggesting a reference level of a restored cultural ecosystem service", 8th Annual Ecosystems Services Partnership Conference 2015 (国際学会)、2015。
- ㉝ 比嘉理麻, ブタからの問い—沖縄における人—ブタの関係史、全南大学校湖南学研究院(韓国)・福建師範大学中琉関係研究所(中国)・沖縄国際大学 学術交流講演会(国際学会)、2015。
- ㉞ Udo, Satoshi, Can fiction create a new vernacular literature? Possibilities of the Taiwanese language viewed from a North African perspective, the 2015 International Conference on Taiwanese Literature Translation (国際学会)、2015。

[図書] (計19件)

- ① 奥野克巳、石倉敏明、松嶋健ほか、*Lexicon 現代人類学*、以文社、2018、224頁(100-103)。
- ② Favareau, D.(ed.), Takada, A., et al., *Co-operative Engagements in Intertwined Semiosis: Essays in Honour of Charles Goodwin*, U of Tartu P, 2018、418頁。

- ③ 池谷和信、高田明ほか、狩猟採集民からみた地球環境史、東京大学出版会、2017、320頁(203-216)。
- ④ Keller, H.(ed.), Bard, K. A.(ed.), Takada, Akira, et al., *The cultural nature of attachment: Contextualizing relationships and development*, MIT Press, 2017、448頁。
- ⑤ De Antoni, A., and P. Dumouchel (eds.), *The Practices of Feeling with the World: Towards an Anthropology of Affect, the Senses and Materiality*. Special Issue of the *Japanese Review of Cultural Anthropology*, 18(1), 2017。
- ⑥ 高梨克也、基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法、ナカニシヤ出版、2016、161頁。
- ⑦ Takada, Akira (ed.)、Special Issue: Natural history of communication among the Central Kalahari San、*African Study Monographs, Supplementary Issue*, 52、2016、187頁。
- ⑧ Lovis, W. A. & Whallon, R. (eds.), Takada, Akira, et al., *Marking the Land: Hunter-gatherer creation of meaning in their environment*, Routledge, 2016、303頁(180-200)。
- ⑨ 高田明、高梨克也、遠藤智子、黒嶋智美、マシュー・バーデルスキー、嶋田容子、森田笑、川島理恵、高木智世、子育ての会話分析 - おとなと子どもの「責任」はどう育つか、昭和堂、2016、264頁。
- ⑩ 菅原和孝、池澤夏樹、鷺田清一、佐藤知久、梶丸岳、大澤真幸、佐野文哉、田中雅一、大村敬一、風戸真理、松嶋健、春日匠、森下翔、世界の手触りーフィールド哲学入門、ナカニシヤ出版、2015、272頁。
- ⑪ 中河伸俊、渡辺克典、速水奈名子、芦川晋、鶴田幸恵、平本毅、南保輔、永井良和、天田城介、滝浦真人、高田明、触発するゴフマン: やりとりの秩序の社会学、新曜社、2015、285頁。
- ⑫ 長谷川啓三、岩本脩平、伊東優、志田望、花田里欧子、*Interactional Mind VIII*、北樹出版、2015、140頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三原 芳秋 (MIHARA, Yoshiaki)  
一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授  
研究者番号: 10323560

### (2) 研究分担者

松嶋 健 (MATSUSHIMA, Takeshi)  
広島大学・社会科学研究科・准教授  
研究者番号: 40580882

高田 明 (TAKADA, Akira)  
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授  
研究者番号: 70378826

花田 里欧子 (HANADA, Ryoko)  
東京女子大学・現代教養学部・准教授  
研究者番号: 10418585

太田 貴大 (OTA, Takahiro)  
長崎大学・水産・環境科学総合研究科(環境)・准教授  
研究者番号: 30706619

岡本 雅史 (OKAMOTO, Masashi)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号: 30424310

鶴戸 聡 (UDO, Satoshi)  
鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授  
研究者番号: 70713981

高梨 克也 (TAKANASHI, Katsuya)  
京都大学・情報学研究科・研究員  
研究者番号: 30423049

比嘉 理麻 (HIGA, Rima)  
沖縄国際大学・総合文化学部・講師  
研究者番号: 00755647

### (3) 連携研究者

中川 奈津子 (NAKAGAWA, Natsuko)  
千葉大学・人文科学研究科・研究員  
研究者番号: 50757870

中谷 和人 (NAKATANI, Kazuto)  
京都大学・人間環境学研究科・研究員  
研究者番号: 40769775

アンドレア デアントーニ (Andrea De Antoni)  
立命館大学・国際関係研究科・准教授  
研究者番号: 10706865

### (4) 研究協力者

赤嶺 宏介 (AKAMINE, Kosuke)  
『地下室』編集人

川上 夏林 (KAWAKAMI, Carine)  
京都大学・博士課程